

<b>Title</b>	欧州に派遣された「女の軍人さん」：日赤救護班と第一次世界大戦
<b>Author</b>	荒木, 映子
<b>Citation</b>	人文研究. 64 巻, p.5-35.
<b>Issue Date</b>	2013-03
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学院文学研究科
<b>Description</b>	衣笠忠司教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

## 欧州に派遣された「女の軍人さん」 —日赤救護班と第一次世界大戦

荒木 映子

日英同盟を理由に第一次世界大戦に参戦した日本は、看護婦を中心に構成された日本赤十字社の救護班を露・仏・英に派遣する。1887年国際赤十字への加入を承認された日赤は、政府と軍部と一体となり、皇室を後ろ盾にして、キリスト教的博愛の精神に日本的報国をかけあわせた独自の理念と中央集権体制で、世界に例を見ないほど組織を拡大していた。日赤病院は、軍隊救護のための看護婦を養成する場として発足し、すでに日清戦争や日露戦争で看護婦の救護班を派遣している。その実績がかわれて初めての欧州派遣となったが、これは西欧中心の国際体制に日本が参入するための政治的威信をかけた挑戦でもあった。幸い好成績をあげての帰国となり、救護看護婦達の名声はますます高まることになる。

まず、あまり知られていない救護班派遣について、その経緯を赤十字運動の発展史の中に位置づける。次いで、外国との接触を通して近代日本が形成されていく時期に、「女の軍人さん」がどのようにつくられ、どのような役割を担わせられていったかを、日赤関係の文献だけでなく、救護看護婦に言及している文献を通して考察する。さらに、第一次世界大戦時のイギリスにおける女性の戦争貢献と比較して、この派遣活動についての言説をジェンダーの視点から分析する。



図版1 'Canadian and Japanese Wounded Outside a Dressing Station, Western Front, October 1916' (C.O. 914, Imperial War Museum, London)



図版2 「戦線の日本人看護婦」(Photo-Album 18-IFFFA0018, Knowledge Centre, In Flanders Museum, Ypres)

## I. 戦線の日本人義勇兵と日本人看護婦

二枚の写真がある。

最初一枚は、ロンドンの帝国戦争博物館の写真アーカイブに保管されている第一次世界大戦のコレクションの中の一枚である。「1916年10月傷病兵治療後送所における、負傷したカナダ兵と日本兵」(C.O. 914)というキャプションがついている。2007年にアーカイブでこれを見つけた時には、日本は陸軍を派遣していないはずなのに、なぜ日本人がいるのか不思議に思い、コピーをとって持っていたが、後になってから、日本人移民がカナダ軍の義勇兵として出兵していたことを知った。19世紀後半から、日本人は建設作業や漁業、農業、鉱業の仕事

を求めて多数カナダに出稼ぎに行っている。ハワイやアメリカ西海岸や南米へ渡っただけでなく、中にはハワイからさらにカナダへと向かう者もいた。彼らが住んだのは、ブリティッシュ・コロンビア州ヴァンクーヴァーの下町パウエル街に集中していて、日本人街ができていたが、職を奪われたカナダ人からの反感が強まり、アジア人排斥運動が起こり、日本政府は奨励していた移民を制限せざるをえなくなった。当時の日系移民には選挙権がなく、一級市民と認められていなかったのも、第一次世界大戦にカナダ義勇兵として出征すれば、カナダに対する忠誠を証明することにもなり、選挙権獲得につながるのではないかと考えた人物がいる。それが、山崎寧<sup>やすし</sup>なるヴァンクーバーの大陸日報社社長であった。邦字新聞『大陸日報』紙上で「加奈陀日本人会」からの義勇兵募集の広告を打ち、強引に寄付を募り、日本人だけから成る義勇兵の一個中隊の編成はならなかったものの、最終的に排斥運動の少ないアルバータ州のカナダ兵大隊に約 200 名の日本人が採用編入されるまでにこぎつけた。ここに至るまでの顛末は新聞記事を読むとよくわかるが、山崎の大変な苦勞の賜物であった。こうして 1916 年 6 月に第一陣がヨーロッパの激戦地へと出征し、戦死者 55 名、戦傷者 129 名を出して休戦を迎えた。戦死者は出征者の四分の一であるからかなりの高率である。多大な犠牲を払ったにもかかわらず、ようやく 1931 年になって日系軍人にだけ選挙権が与えられるが、第二次世界大戦の勃発で剥奪されたばかりか、日本人は強制収容所に送還されることになった。この一枚の写真は、日本人移民の悲しい歴史を物語る一コマでもある。

もう一枚は、ベルギーのイープルにあるイン・フランダーズ・フィールズ博物館ノリッジ・センター所蔵の、第一次世界大戦時の日本人看護婦の写真である。写真の下の方には、「戦線の日本人看護婦」とオランダ語の説明が手書きされている。これは、おじかおばからもらったアルバムをオランダ人女性が 2011 年頃にセンターに寄贈したものだそうだ (Photo-Album 18-IFFFA0018)。アルバムの表紙には、オランダ語で『大戦の記憶』と書かれていて、戦場や兵士を撮った報道写真と思われるものが大半を占めている中に、この写真はあった。袖付けの山が高く盛り上がった特徴ある白衣と、菊の花を模った深々とした看護帽は、第一次世界大戦の初期に日本赤十字がフランスに派遣した看護婦が身に付けていたものではないかと思われる。こう結論づける前には、もしかしたら、カナダの赤十字に志願して西部戦線へ行った日本人移民かもしれないと考えて、そういう女性がいなかったかどうか、カナダ国立図書館公文書館や日系カナダ人協会に問い合わせたり、『大陸日報』のマイクロフィルムを読んだりして調べたが、見つからなかった。カナダで女性だけの義勇隊がイギリスにならって編成されたという記事はあったが、日本人女性が志願したかどうかは不明である。ただ、決定的なのは、制服の違いで、イギリス連邦の看護婦は白いヴェールとエプロンをかけているので、やはり日本から派遣された看護婦と見るのが妥当であろう。なぜどんなふうにもオランダ人のものに、この写真が届いたのかはわからないが、一人包帯を巻きながら写っている肖像写真は、あるいは現地の新聞か雑誌に掲載されていたものかもしれない。ただ、背景がなく、手書きの説明以外に撮

影場所を示す手がかりはない。

連合軍とドイツ軍との激戦が五回にわたってイーブルのすぐ近くで繰り広げられ（最初にドイツ軍によって使われた毒ガスがイペリットと呼ばれたのはこのため）、完全にこの町は廃墟と化していたが、イギリスの援助もあり、今では往時のままに織物会館や聖マーティン教会等が再建されて、美しい街のたたずまいを取り戻している。周辺には、1920年代に150もの軍用墓地がつくられ、これらの墓地やかつての戦場に案内する戦場ツアーの会社がイーブルには多い。イギリス軍は戦没地埋葬の原則を早くから定めていたので、英連邦戦争墓委員会（the Commonwealth War Graves Commission）が管理する手入れの行き届いた庭園墓地を、イギリスだけでなく、カナダ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドからの旅行者・墓参客が大勢訪れている。ガイドの方も英語圏からやって来てイーブルに住み着いた人が多いようだ。イギリスの学校では、教育目的で生徒を連れて行く。町の東方、イギリス兵が戦線に出て行ったメニン・ゲートには、戦後イギリスの建築家ブルームフィールドによりローマ風凱旋門が建てられ、1918年8月15日までに行方不明となったイギリス軍の兵士の名前約55,000名が刻まれている（これ以降の行方不明者の名前は、パッシェンデルにあるイギリス最大の墓地タイン・コットのパネルに続き、遺骨が発見されて新しい墓ができると、これらの名前は消されてゆく）。このメニン・ゲートには、二人の日本人の名前が刻まれている。それが、カナダ軍の義勇兵となって西部戦線で戦った小柳彦太郎と西岡貞治である。

二つの博物館でたまたま出会ったこの二枚の写真は、イギリスの大戦期の文学や文化を勉強していた筆者に、思いもよらず、日本と第一次世界大戦について考えるきっかけをつくってくれた。日本では当初「欧州戦乱」と呼ばれたこの戦争よりは、一般の日本人にとってははるかに第二次世界大戦、アジア太平洋戦争のインパクトの方が大きい。最近日本の歴史学は、第一次世界大戦が第二次世界大戦におとらず日本にとって意味をもつものとして注目しているように思われる。「世界大戦」とは呼ぶものの、ヨーロッパ中心史観にたつ欧米の歴史学の是正という面もあるかもしれないが、日本が実戦に巻き込まれることは少なかったとはいえ、イギリス、中国、アメリカとの外交戦をも含んだ「複合戦争」であったこと、国家存続の危機感が生まれ、以後の日本と世界との関係に大きな影響を及ぼすものとなったこと等が指摘されている<sup>1)</sup>。たいした損失を払わず軍需景気にわいた「大正の天佑」であったというだけではすまないのである。歴史学者ではなく、赤十字や人道法や看護学の専門家でもなく、しかもヨーロッパの側から大戦を研究してきた筆者にできることは、欧州派遣の救護看護婦が持つ意味を比較文化史とジェンダーの視点から考察することである。近代日本が西欧との接触を通して形成されていく時期に、日本赤十字社（以下「日赤」と略称）の救護看護婦はどのようにつくられ、どのような役割を担わされてきたのだろうか？救護看護婦の派遣先での活動を種々の文献を照らし合わせることによって浮かび上がらせ、西欧と日本との文化的・思想的背景の違いを検討しながら、救護看護婦が内包する問題点を考察する。

## II. 日赤救護班が欧州へ派遣されるまで

日本は日英同盟を理由に第一次世界大戦に参戦したと言われているが、そのやり方はいささか唐突であった。1914年8月4日にイギリスがドイツに宣戦布告をした時には、日本は中立宣言を出していた。日英同盟は、自動的に参戦を義務づけていないし、軍事行動の適用範囲はアジアに限定されていたのである。ところが、一転して、8月23日、イギリスが躊躇している間に日本はドイツに宣戦布告する。ここには、ドイツ領南洋諸島を占領し、山東半島のドイツ権益を奪い、日露戦争後の軍需景気の低迷を打開し、ひいては中国に対して有利な立場に立ちとうとする思惑がはたらいていた。こうして、連合国側に加わって参戦した日本であるが、実戦にかかわることは少なく、動員された兵力は80万人、戦死者300人、戦傷者900人余り(1924年米陸軍省の統計による)となっている。世界中で第一次世界大戦の戦死者は1000万人、戦傷者は2000万人と言われているから、日本の犠牲者の数は極端に少ない。日本人戦死者のうちの大半は、1914年秋、山東半島のドイツの租借地青島の要塞を日本が攻撃した時のものである。次いで多く戦死者が出たのは、1917年2月、イギリスからの出兵要請を受けて、海軍が地中海へ駆逐艦隊を派遣し、連合国軍の軍隊輸送船の護衛にあたった時で、ドイツのUボートに雷撃されて50名以上が死亡している。マルタ島には、兵員や物資の輸送を果敢に守った日本海軍「第二特務艦隊」の墓がある。

この地中海での後方支援を除けば、日本にとっての本格的な実戦は、1914年11月に青島を占領するまでだけだったと言っても過言ではない。1915年には、火事場泥棒的に、中国における日本の権益拡張をはかる「対華二十一カ条要求」を袁世凱政府に認めさせ、1916年には、ヨーロッパの交戦国や植民地への輸出を伸ばし、南進政策の結果南洋ブームに沸いたのである。しかし、それで終わりではなかった。1917年に、疲弊していたロシアに11月革命が起こり、ボリシェヴィキ政権が成立、対ドイツ単独講和を結び、ロシアが東部戦線から離脱するという事態が生じる。このため、ドイツ勢力が西部戦線に集中するのを防ぐ目的で、新たに参戦した軍事力のあるアメリカと地理的に近い日本に、イギリスやフランスがシベリアへの出兵を要請することになる。しかし、派兵の目的も思惑も混沌としたまま、大戦が終結し各国が撤兵した後も、日本は駐留を続け、パルチザンとの抗争で犠牲者を出している。シベリア出兵は、日本にとって、第一次世界大戦が対独戦争で終わったのではなく、大戦の余波がまだ続いていることを示すものとなった。

さて、そんな中で、日本が非戦闘員である看護婦を戦火のヨーロッパに派遣させるに至ったのは、どういう経緯によるのだろうか？日本の赤十字を論じたオリグ・チェックランドは、皮肉っぽく、「ヨーロッパで任務を果たした日本人要員は、英仏露に派遣された赤十字部隊だけだった」<sup>2)</sup>と述べている。欧州派遣看護婦の詳しい(時として詳しすぎる)資料としては、

日本赤十字社発行の社史『日本赤十字社續稿 自明治41年至大正11年』下巻がある。これによれば、1914年9月8日、陸軍大臣は日本赤十字社副社長小澤男爵を呼んで、日本赤十字社より救護員を英仏露三国に派遣することが閣議で決定されたことを伝えた、とある(341頁)。日本参戦からひと月もたないうちの迅速な決定である。しかし、これに先立ち、青島攻撃の時に、日赤は初めての看護婦組織による救護班の海外戦地派遣を行っている。青島守備軍病院等において、1917年11月26日から翌年11月22日まで、救護員67名中看護婦40名で、日本軍だけでなくドイツ人俘虜の傷病者の看護にあたったという。さらに遡れば、海外戦地に派遣されたのではないが、日清戦争では内地の陸軍予備病院勤務、北清事変では外地からの患者輸送にあたる病院船勤務、日露戦争では内地病院勤務と船上勤務(男性の看護人のみ外地派遣)を看護婦は経験している。もっとも、最初の日清戦争のケースでは、傷病将兵の看護に日赤の看護婦を派遣させるという話がすんなりまとまったわけではなく、いやしい看護婦に名誉ある帝国軍人の世話をさせるのはけしからんと猛反対があり、それを説得しての実施であった<sup>3)</sup>。これまでの戦争における看護婦の優秀な働きが評価されてきたおかげで、欧州派遣につながったということである。また、もともと戦時救援を目的として創設された赤十字社の活動が徐々に拡大された結果でもあった。日本赤十字社の起こりと特色については、第IV章で述べるので、ここでは、第一次世界大戦の看護婦派遣に絞って論じることとする。

さて、『續稿』下巻によれば、陸軍大臣の要請を受けた小澤副社長は帰社すると、花房社長他と審議をして、「医員1名、看護婦20名、外国語を解する事務員1名、通訳1名を以て1個救護班の編成とし、英仏露に各1班を派遣し同国赤十字社の救護事業を幫助すること」「本件は外務大臣に対し本社がこの提供を申し込む時は、各国政府及び赤十字社がこれを接受するかどうか、予め当該国駐在の日本の大使に同国政府と相談するようにしてもらいたい」(342頁、以下旧表記法の史料はすべてわかりやすい表記にあらためている)と決議する。そして、9月12日には、花房社長が外務大臣に面会し提供を申請、大臣はこれを受けて、各国駐在大使にこの申し出を受けるかどうか政府に打診するという手続きを経、さらに各国政府が歓迎の意向と救護班の編成等詳細を知りたい由伝えてきたので、本社は常議会(日赤社員から選ばれた常議員から成り、重要な事件を議決する)の決議と陸海軍大臣の認可を得て、次のような派遣内容を決めた、とある。「第一に露国、第二に仏国、第三に英国に救護班を派遣し、露仏においては病院の開設(露では患者100名、仏では患者150名を収容する)にあたり、英では主として看護に従事するものとし、各その勤務期間は5か月と予定する。」(342-3頁)

ここまでの派遣に至る手続きを見ても、日赤と軍部、政府との密接な関係が、今日の視点からすると異常なものとして浮かび上がってくる。日赤の活動は当時勅令として下されていた日本赤十字社条例に基づかなければならなかった。条例は1901年に定められていたが、1908年に若干の文言修正と新たな条文の追加が行われていた。改正条例第1条には、「日本赤十字社は救護員を養成し、救護材料を準備し、陸軍大臣、海軍大臣の定むる所に依りて、陸、海軍の

戦時衛生勤務補助」とあり、戦時の準備をし、陸海軍の指揮下にあることが明確化されている。第3条には、陸海軍大臣は、第1条のために日赤を「監督」と定め、さらに第10条では、戦時救護員等の軍隊に準じた階級制が決められている。すなわち、戦時勤務中、「日本赤十字社の理事員、医員、調剤員、及び看護婦監督の待遇は、陸、海軍将校相当官に、書記、調剤員補、看護婦長、看護人長及び輸長の待遇は、下士に、看護婦、看護人及び輸送人の待遇は、兵卒に準ず。」(『續稿』上巻604-12頁)とある。このように世界に例のないほど軍や政府と緊密に結びついていたおかげで日赤は発展していったとも言えるのである<sup>4)</sup>。

日赤が戦時救護の名声をあげるためにも、日本が国力を発揚するためにも、初めての長期にわたる看護婦の海外派遣は、どうしても成功させる必要があった。そのため、救護員の人選には慎重を期した。すなわち、「救護員は多少外国語の素養があること、技量優秀なること、身体強健なること、精神堅実なること等」を選抜の基準とし、道府県別に選抜を行わせた。こうして選ばれたのが、露国派遣は、看護婦長1名、看護婦12名、仏国派遣は、看護婦長2名、看護婦21名、英国派遣は、看護婦長2名、看護婦20名の精鋭である。先の条件に加えて、北清事変、日露戦争での救護経験の有無も考慮されているようだ。救護病院の開設、拡張にあたるのを主目的とする露国、仏国とは異なり、英国は、「戦場の看護に熟練した陸軍病院の看護婦から成る救護班と承知している」ので、「適当に職務に従事し得る者を派遣してもらえらば、その援助を歓迎する」(『續稿』下巻407-8頁)という条件付きの意向が英国外務大臣から伝えられてきた。そこで、日赤本社の常議会において、露仏とは異なり、傷病兵の看護に従事する組織を編成することを決定し、英国側に、人選には十分注意しているが、英語の習練は不十分であること、また、看護婦は主として内地に設けた戦時陸軍病院で勤務しているので、英国内の勤務地を希望すること等の意見が送られた。その結果、サウサンプトンのネトリー赤十字病院に配置されることが決まり、1914年12月19日横浜港を出帆、米国経由で、イギリスに向かうことになった。露国派遣班は、すでに1914年10月23日に東京を出発して、ペトログラードにおいて活動を開始しており、仏国派遣班は12月19日横浜港を出帆、ボルドーを勤務地に希望していたが、最終的にパリの高級ホテル、アストリアにおいて日本赤十字病院を開設することになった。

日本の威信をかけた日赤看護婦のヨーロッパ派遣は、どのように報道されていたのだろうか？ 1914年10月11日、『東京朝日新聞』朝刊には、「赤十字旗を翳して 露国に向かう救護団一粒選りの人物揃い」と題した記事が掲載され、上野医長以下の救護班の構成員が称揚され、「その他医員看護婦等の人選には最も苦心を費やし、何れも操行技術語学及び健康と三拍子四拍子を兼備せる一粒選りの理想的人物揃いなり」と結ばれている(帰着後、医長と婦長との間の醜聞が報道されたが、真偽のほどはわからない)。ロシア語については、通訳の二人が解するのみで、あとはドイツ語、英語を解するものがいたというのが実情であった。この頃の朝日新聞には、写真入りで日赤救護班の活躍のニュースがしきりに報道されている。12月17日



の『東京朝日新聞』は、遠くフランスへと赴く新橋駅の「看護婦の健気な姿」を伝え、20日の同紙は、遣外班の掉尾を飾る遣英救護班の雄姿をとらえている。場所は同じく新橋駅、以下、当時の状況と新聞の書きぶりが面白いので、少し長いが引用する。

医長は一等車、大島医員に事務員と通訳は二等車、看護婦団は三等車と別れ別れに乗り込む。窓の外には身動きもならぬ見送りの群がプラットホームを真っ黒にうずめている。鍋島侯爵夫人...をはじめ篤志看護婦の主だった婦人が白襟紋付で並んでいる。発車間近に駆けつけた英国大使夫妻も「御道中折角お大事に」と暖かい大きな手を延べて握手をする。医長夫人は裾模様の千歳染めの二枚重ねに肥った身体を包んで厚化粧の額に優しい笑みを湛えながら、右手に二つ、左手に一つの指輪、それに腕輪さえ光る手を軽く動かして見送りの人にそれぞれの応対、家族の人々を伴って横浜まで同行する。11時55分、万歳の声に送られてその長い列車が軋りだす。看護婦団は英国大使から贈られた花束を手にしなが、遠ざかり行く列車の窓から首を差し延べて、5か月後でなければまた再び見れぬ東京に別れを惜しんでいた。古い新橋停車場はこの最後の記念すべき賑わいを以て、光輝ある43年の歴史の最後の頁を閉じた。

これだけ期待された欧州派遣救護事業のことが、今日あまり日本で知られていないのが不思議



図版 3 *The Sun*, Tuesday, January 12, 1915 (博物館明治村所蔵・日本赤十字豊田看護大学保管、「欧州戦乱 英国派遣救護班報告 其一」ファイル戦 721)

なくらいである。

英国派遣救護班は、途中アメリカに立ち寄っているが、短いニューヨークでの滞在のうちに米赤十字の午餐会に招かれ、歓待されている。その際、日赤は世界の赤十字の模範であり、青島の戦争の際の救護班の活躍や、ドイツ捕虜に対する待遇の親切さについて賞賛されている<sup>6)</sup>。ニューヨークに着いた遣英救護班のニュースを伝える『ニューヨーク・ヘラルド』紙（1915年1月12日）は、「日本は戦争被害者に救いの手をさしのべる」「陸軍病院へ向かう19人の可愛い看護婦達、ニューヨークの摩天楼に驚く」という見出しの下に班の構成員の写真と名前が掲げられている。濃紺の制服にそれより薄い青色の帽子をかぶり、腕には赤十字の記章の入った白い腕章、スエードのバッグを兵士のように斜め掛けにした看護婦達のニューヨーク滞在中のエピソードが語られる中に、女性参政権獲得運動の活動家の一人が、女性参政権の問題についてどう考えるかを尋ねたが、看護婦長の山本しか英語が話せないと告げられてあきらめたという苦笑を誘う出来事が載っている。同日『ザ・サン』紙にも、写真入りで、「日本は立派な看護婦と医者を持っていたか？持っていた。」という見出しと肯定的な記事が書かれている（図版3）。背筋をしゃんと伸ばした凛々しい姿は、今日の日から見ても頼もしさを感じる。

### Ⅲ. 救護班はどう受けとめられたか？

さて、こうして期待されて行った結果はどう評価されたかということになると、おそらく、当初それぞれ5か月を予定していた派遣期間が、先方の希望により、露仏では二回、英では一回延長されているという事実が最もよく物語っているのではないかと思う。宿舎の提供を受けたり、一部当該国での移動の際の交通費を負担してもらっているということはあるにせよ、基本的に日赤側の経費で賄われる奉仕活動であり、派遣費の合計は三カ国で74万2237円34銭9厘にのぼったと報告されている（『續稿』下巻350-1頁）。しかし、経費の問題だけでなく、長期にわたり、慣れない異国で激務にあたる救護員の健康不安があり、かといって交代するとなれば適任者を探すのが困難かつ多大の手数と費用がかかるとの懸念があり（『續稿』下巻366頁）、いつになるかわからない戦争終結まで活動を続けられなかったというのが実情のようだ。チェッコランドは、日本人部隊の救護活動について否定的な見方をして、よく訓練された日本人部隊ではあっても、「派遣された国々で厄介な存在になったのではないか」とか、「戦争終結の2年以上前にこれらの部隊が撤収した事実には、奉仕活動が困難さをかかえていたことを物語っているのではないか」<sup>6)</sup>と憶測している。が、少なくとも日本側の資料を読む限り、そういう事実は見えてこない。露国派遣班の業務報告によれば、病院開設当初は、「言語不通習慣の相違等により治療及び看護に困難を感じたりしが、日を経るに従い、医員及び看護婦等の熱心なる治療に対し患者は安心と満足とを加え概して経過良好に向い、日露看護婦間の関係もまた頗る円満にして…」（『續稿』下巻362頁）とあり<sup>7)</sup>、仏国救護班は、「仏国官民の信頼

頗る厚く好評噴々、当地戦時病院の模範なりと称揚せられ」(『續稿』下巻 398 頁)、特に、9名の医師が診察しても治療の方針が決まらなかった一将校患者を1週間で全治させた外科の鹽田医長の手腕が高く評価されたこと(『續稿』下巻 402 頁)等が記されている。

その鹽田医長に島崎藤村は、パリに開設された日赤病院で出会っている。藤村は、1913年の4月からフランスに滞在し、戦前の平和なパリが徐々に戦争の空気に包まれてくる様子を「仏蘭西だより」という書簡形式の紀行文に書き綴った。これらは、『東京朝日新聞』に連載され、後、本として出版されている<sup>8)</sup>。その中の「篤志看護婦」によれば、藤村は4人の日本人と一緒に、旭日旗と赤十字旗が屋上に翻るパリ凱旋門近くのホテル・アストリアに「鹽田君」を訪ね、開設して間もない日本赤十字病院を案内してもらう。病院の開設なので、日本から持ってきた大量の医療用物品や器械がまるで「日本に関する展覧会場」のように並んでいて、薬局、手術室、実験室、病室等々が欧州一流のこのホテルの全階にあてられている。後進国である日本が最新の科学技術を投入して製造した精巧な器械は、仏蘭西人の注目を集めている、と誇らしげに鹽田は説明する。そこで藤村が目にしたのが、白い看護服を身に着けて働くフランス人「篤志看護婦」であった。これらの人達は、「男子の義勇兵」に相当する意味があるが、パリの「交際社会」に属する一部の上流階級の女性達である。鹽田の説明によれば、看護婦の資格もないのに、赤十字救護班へ来て手伝っている、いわゆる「ダーム・ブロンテエル」なのだそうだ。夜会や舞踏会もない今は、赤十字に来て働いているとでも言わなければ、交際社会で幅がきかないので、赤十字病院の内部がパリにおける一種の交際場裡を形成しているらしい。病人を慰めるとか、食べ物を運んで行って食べさせてやるとかいう手伝いは誠にありがたいのだけれど、患者をいじるとか、医者がいるのに、もっと薬を飲ました方がいいと一人で騒ぎ立てたりして、むしろ邪魔になる人がいる、とのことであった。「ダーム・ブロンテエル」は二十数人いるようだが、次々と友人だの親類だのを連れてきて、正確な数はわからない、身分があるだけに、新しいのを連れてきても受付の兵隊は強く言えない、陸軍省に掛け合いに行っても、事情はわかっているが、戦時のことでもあり、せつかく手伝いに来てくれているのに、すげなく断るのも…といろいろ打明け話が続く。藤村は、この別天地のようなパリの交際場裡に、「職責を辱めまいとする吾が救護員の心づかいと、篤志看護婦の貴族趣味」を同時に見るのであった。開院して3か月にも満たないこの時では、まだ救護班全体の活動評価はくだしえないが、病院の日常を十分にうかがわせる貴重な証言である。

英国の場合は、露仏と異なり、英国陸軍の隷下として英国赤十字社の命令を受けて、既存の病院での英国看護婦との共同での活動となった。場所は、ロンドンの西南、サウサンプトンの入り江に面した英国最大の病院ロイヤル・ヴィクトリア陸軍病院の裏手、英国赤十字社が第一次世界大戦に際して急造した木造「バラック」50棟。風俗習慣が異なり、英語もまだ不十分であるため、日本の看護婦は(日本人医員の配下に入る二人を除いて)英国看護婦と共に英国医員受け持ちのバラックに2名ずつ配属されることになった。この仮舎ができるまで一行はロ

ロンドンのホテル・ラッセルで1週間程待機したが、その間英国陸軍省や英国赤十字、王室、外務省等から国賓のような歓待を受けている。1915年1月31日にネトリーに行き、翌日から勤務を始める。

このネトリーのロイヤル・ヴィクトリア陸軍病院はさまざまな歴史的意味を持つ病院である。19世紀半ばにヴィクトリア女王が、クリミア戦争の惨禍を聞いて傷病兵の収容施設として設立した帝国主義の栄華を象徴するものである。四分の一マイルもファサードが横に広がる建物は宮殿を思わせる。ネトリーはイギリスで最初に看護婦を軍務に就かせた病院でもあった。ナイチンゲールの訓練を受けた看護婦であったが、ナイチンゲールはこの病院の設計図を見て、換気も照明も不十分である上に、長い廊下をはさんで両側にベッドが並ぶ構造上の問題を直ちに指摘し、変更をせよとしたが、時すでに遅かったという経緯がある。その結果、この巨大すぎる厄介な建物をもてあますことになったが、それでも、病院だけではなく、軍医養成（シャーロック・ホームズの相棒ワトソンはここを卒業したことになる）、看護婦養成、医学の研究（腸チフスのワクチンが最初に開発された）の施設として1世紀以上にわたって存続した。病院から少し隔たった所にあるDブロックと呼ばれた建物は、精神疾患の患者を収容し治療するためのもので、イギリス初の軍精神病院であった。1845年の法令で、精神病患者は監禁されるのではなく、治癒の目的で治療される方針が変わっていて、病院の増設が必要だったのである。患者の治療前と治療後の様子が多数白黒のフィルムに残っている。第一次世界大戦が起こると、前線から大量の「シェル・ショック」患者が運ばれてくることになる。後に戦争詩人として有名になるウィルフレッド・オーウェンが負傷して運ばれてきたのが、付属の赤十字病院の仮舎である（日本の救護班はこのうちのアイルランド病院に勤務していたが、オーウェンが収容されたのはウェールズ病院）。1917年6月のことである。1週間程後には、エジンバラのクレイグロックアート軍事病院へシェル・ショックの治療のために移され、そこですでに戦争詩人として有名だったシーグフリード・サスーンと運命的な出会いをすることになる。第二次世界大戦では、アメリカ軍がここを譲り受け、病院の長い廊下をジープで走り抜けたという。その後、火事で大半の建物が燃えたが、もともと使いにくかったこの建物は再建されることはなかった。

この軍事病院には、すぐ北にあるネトリー僧院の廃墟にまつわるエピソードと同じくらい、陰鬱な歴史が閉じ込められている。ゴシック建築の廃墟は、そのまま病院のゴシック的雰囲気を引き継がれた感があると、フィリップ・ホアーはネトリーの病院の文化史をあぶりだした著書『スパイク島』で述べている。この中に日赤の看護婦のことがほんの数行だけ言及されている。

仮舎の病院では、22人の日本人看護婦の一団が、まぶしそうに眉をひそめながら、集合写真を撮るために静かに腰をおろしている。班長の鈴木次郎博士のまわりに列をつくって小

さくまとまったこの使節団は、無料奉仕のために太陽の上る国からやって来たのだ。…<sup>9)</sup>

これだけの記述では、救護班の活動について知るよしもないが、ネトリーの病院全体の歴史からすれば、大戦中の一時期に病院の一角を占めたエピソードにすぎないのである。



図版 4 ネトリーのバラック病舎を背景にしての記念撮影。日本人医員と看護婦、英国人看護婦。右端は、山本ヤヲ英救護班婦長。(博物館明治村所蔵・日本赤十字豊田看護大学保管、「欧州戦乱 英国派遣救護班報告 其一」ファイル戦 721)

もう一つ、赤十字の資料以外で、日本の救護班の仕事ぶりに触れた体験記がある。思いがけず、冒頭にあげた二葉の写真の接点が見られるのである。カナダから西部戦線に赴いた日本人義勇兵の一人、諸岡幸磨<sup>さちまろ</sup>はヴィミー・リッジ砦の総攻撃で死を覚悟して戦ったが、腰部を負傷し、野戦病院に送られ、さらにフランスの英赤十字病院で手術を受けた後、病院船で運ばれた先がネトリーの英国赤十字病院だったのだ。1917年5月のことである。重傷患者が30人ばかりいる第38号室に収容されるが、ただ一人の日本人で、珍しがられて、優遇されたと書いている。体験記は、戦線に復帰することができなくなった諸岡がカナダを経て日本へ帰ってから書き、1934年軍人会事業部から『アラス戦線へ』という題で出版された。諸岡が驚いたことには、ここのイギリス人看護婦達が皆「お早う!」「今晚は。」「結好なお天気です。」「如何ですか?」などと話しかけてくるのである。主任の看護婦にその訳を聞いてみると、日本政府から派遣された日本赤十字病院救護班の人達がこの病院に来ていて、負傷兵のために「1か月余り」(実際にはほぼ1年であるので、諸岡の聞き違いと思われる)「熱心に、親切に、働いて下さり、半年ほど前に帰国したけれども、「皆さんが親切で、丁寧であったので多くの患者達は、あの人達を兄妹のように懐かしがって、今にそのあとを慕っているのです」とのことだった。そして、今も手紙をやりとりしていて、意味はお互いにわからないけれど、「お互いの真

心だけは通じ」て、日本からきた日本語の手紙を40通余り持って来て、諸岡に訳してくれと頼むのだった(349-51頁)。日本からの救護班については、これだけの記述であるが、十分イギリス人の受け止め方を示している。

『アラス戦線』はまた、イギリス人女性達の戦時貢献についても触れている。

看護婦も皆篤志看護婦で、上流社会の婦人達と、中流社会の婦人達で、大部分を占めている。名流の婦人や、令嬢達が、私達の大小便の世話から、便所の掃除や、雑巾がけまでするのだ。殊に見習中などは実に気の毒なほど、種々の仕事をさせられる。

…… そして心持よく平等に取り扱ってくれる。そのみでなく、我々日本人などは、下へも置かぬように優遇してくれる。しかも彼女達は無報酬で、真に献身的の働きをしているのだ。

彼女達は高潔な品性の持ち主だ。その親切で同情に富んだ看護ぶりは、真に驚嘆に値する。

病室で下劣な流行歌などを唄うような不心得の者は一人もない。さすがに英国の婦人達はちがったものだと感心させられた。(373-4頁)

藤村がパリで見た篤志看護婦とは大きな違いである。イギリスの篤志看護婦を代表するのは、「篤志救援班」(VAD=Voluntary Aid Detachment)に属する原則23歳から38歳の中流階級以上の女性達である。看護婦不足を補うために、短期養成講座を受けただけで病院に配置されていた。少しでも貢献したいという高邁な精神に貫かれた人達で、男性の志願兵に相当すると言える。VADは、戦時に看護や医療の補助をする目的で、1909年8月に聖ヨハネ修道会(the Order of St John)と英国赤十字社によって設立されていた団体で、戦争が始まってからは英国赤十字社の管轄にあった。男性だけの班と女性だけの班に分かれていたが、出征する男性が増えるにつれ、男性のしていた仕事も女性が引き受けるようになる。第一次世界大戦中には、看護補助として国内の陸軍病院で働くだけでなく、コック、事務員、タイピスト、洗濯係、マッサージ師等々多彩な仕事につき、中には、フランス、ベルギー、ガリポリやメソポタミアまで出かけて、野戦病院等危険な場所で勤務にあたり、傷病兵を運ぶ救急車運転手として活躍したりした女性達もいる。食費と宿泊費は請求できるが無給で、制服も自分で調達しなければならなかった。正式の看護婦(trained nurse)になるためには、3年間の病院でのトレーニングの後試験に合格しなければならなかったが、VADの看護婦は、応急手当と家庭看護の試験にさえ合格していればよかった。従って、給料をもらって専門職をこなしているプロの看護婦からは反感を買うことになり、両者の間で軋轢があったという。1914年に創刊された英国赤十字社の機関誌(*The Red Cross*)の12月号には、「看護婦」と題した記事があり、VADの看護婦を公式に「看護婦」と呼ぶことはできないとしつつも、概して好意的である。批判的なのは、VAD以外の篤志看護婦に対してである。「他方、自分の利益のために、看護

婦になりすます金持ちの女性の事例もあるが、これについては赤十字はあずかり知らぬ」と書かれている。富裕階級の女性が篤志看護婦をかってでる時には、フランスでもイギリスでも困った例があったようだ<sup>10)</sup>。

この違いは、フランスとイギリスの有閑階級篤志看護婦の違いというように一般化できるわけではなく、パリという土地柄の特殊性と、たまたま二人が見聞きしたことの印象の違いからくるものであったと思う。藤村は、自分がかつてリモージュの田舎で見た中学校の建物を代用とした赤十字の仮病院とパリの病院とを思い比べて、別の世界だった、という感想をもらしている。また、諸岡の場合は、カナダ軍とともに戦って負傷した日本人義勇兵であるが故に、本人が認めているように、病院で優遇されていたから、余計いい印象を持った可能性もある。負傷して入院生活を送るようになってからの記録には、上に引用したようなイギリス人賛美が目立つ。国家存亡の危機に際しての英国婦人の献身的な活動にたく感動し、それに比べて、日本の上流婦人や富豪の妻女達は、はたしてどれだけの働きをするだろうかと考えるくらいである(386-7頁)。半年ほど前に帰った日本からの看護婦の熱心な働きを聞いた時の諸岡自身の感想はというと、「驚いた」という以外には書かれていない。日本人看護婦についての活動について仄聞しただけでは、それを評価するところまではいかなかったのかもしれない。

『アラス戦線』は、勇敢に戦った同胞の記録を残すために書かれた。絶版になっていて図書館でなければ読めないのが残念である。第一次世界大戦の記録と思えないほど武士道精神がみなぎっている。塹壕で銃剣を構えて突進してきたドイツ兵に逆に一撃を喰らわせたものの、「お母さん」という叫び声を聞いて、とどめをさすのをやめて捕虜として引き渡したこと(292-4頁)、戦いに臨んでは沈着にして、機敏、斥候に出しては舌をまくほどの正確さ、英兵からも「タチュオカ」と慕われた龍岡義勇兵は、一年間休暇をとって英国の陸軍士官学校で訓練を受けてはどうかと誘われても、義勇兵仲間を捨てることはできないと、この申し出を断ったこと(362-5頁)等々感動的なエピソードが語られる。

我が日本人義勇兵二百名は、数に於いては外人側に及ばなかったが、奮闘力戦の功績は、遙かに彼等の上にあると確信している。

又私達は日本男児としての名を汚すようなことは断じてしなかった。(430頁)

その一例として挙げられているのは、胸に重傷を負って仮野戦病院に運ばれてきた二階堂の武士の態度である。同時に運ばれてきたドイツの将校の方を、看護長は何と思ったか先に手当しようとし、軍医からどなられて二階堂の手当てにかかったが、自分の命はもう助からないと思うから、ドイツの将校の命が助かるなら、先に治療してやってください、と言って間もなく死んだという(430-1頁)。なぜドイツ人から先に看ようとしたのか、白人を優先したのか、トリアージュからなのか、軍医がどなったのは、味方を優先しようとしたからなのか、いろいろ考

えさせられるが、少なくとも二階堂の武士道精神にこそ、敵味方の区別なく救護するという赤十字の精神が一番現われているように思われる。

#### IV. 日赤という文化

ここで、国際赤十字と日本赤十字の起こりについてふりかえり、赤十字精神がどのように日本の理念を施されて普及していったかを述べる。

1859年、イタリア統一戦争の際に、スイス人アンリ・デュナンはたまたま通りかかったイタリアのソルフェリーノで、多数の戦死者、傷病兵が放置されたままになっている悲惨さに衝撃を受ける。そこで、クリミア戦争の時のナイチンゲールにならって、救援隊を結成し不眠不休で救援にあたった。この体験から、戦時における中立的な篤志の救護団体の設置を呼びかける一方、1862年には、『ソルフェリーノの記念』をあらわして克明にこの凄惨な出来事を記録した。こうして1863年ジュネーヴで16か国の参加のもと国際会議が開かれ、戦時には敵味方の区別なく人道的支援をするための国際赤十字が結成されることになった。翌年には、ジュネーヴ条約が調印され、国際赤十字が発足する。国際会議の招集に尽力したスイスに敬意を表し（と言われている）、スイスの国旗の色を逆にした白地に赤の赤十字が、標章として採用されたのはこの時である。これは、紛争地域で救援活動をする機関が中立であり、攻撃してはならないことを示す保護の標章でもあり、イスラム教国の中には、赤新月社と称して、白地に赤色の新月章を用いている国もある。1919年には、戦争による災害だけでなく、あらゆる災難に対して救済の手をさしのべる、いわば平時のための国際赤十字・赤新月社連盟が結成される。

上にあげた概略は、どこにでも書かれている赤十字の成り立ちであるが、通説を部分的に覆し、誤解を正す研究も存在している。まず、赤十字の理念が最初に提唱された時に、反対の声をあげたのは、意外なことに軍医達からで、善意ではあっても民間のヴォランティアに戦場でうろろうらされては、戦闘のみか医療行為の邪魔にもなるというものであった。また、しばしば、ナイチンゲールが赤十字発足のきっかけをつくったとされているが、ナイチンゲールは赤十字の話聞いて、訓練されていない民間人におせっかいをされるのは言語道断、また国家が負うべき傷病兵救護の責任を回避する口実にもなりかねない、と猛反対したという。後になってナイチンゲールはこの態度を和らげたが、ナイチンゲールの反対のおかげで、イギリスの赤十字の成立は困難をきたしたそうだし<sup>11)</sup>。こういう指摘をしたジョン・ハッチンソンは、『チャリティのチャンピオン』において、赤十字というのはいいものであって、赤十字について否定的なコメントをするのは、「戦死した兵士の墓を冒瀆する」のと同じくらいおおよそ考えられないことだという前提に疑義をはさんでいる。そして、赤十字がどんな慈善活動をしたか、ではなく、赤十字とはそもそも何であったかを追求すべきであるとしている。列聖された感のあるデュナンは、『ソルフェリーノの記念』の書き手として紹介されるにとどまり、むしろ、デュ



ナンの呼びかけでつくられた赤十字創設五人委員会のメンバー、法律家で篤志家のギュスターヴ・モアニエを真の赤十字の創設者と見なしている。ハッチンソンの研究は、根本的に戦時救援はしても平和活動はしないという赤十字の理念がジレンマをかかえたものであって、赤十字は戦争のテクノロジーの発達とともに発達していった「戦争のチャンピオン」とも言うべき影の面があることを明らかにしている。赤十字が戦争の存在を前提として中立の立場を貫こうとする限り、戦争犠牲者の救済にのみ集中し、戦争犯罪を目撃しても黙して語らないということになり、光と影の部分をはらんでしまうのは避けられない<sup>12)</sup>。

日本の赤十字は、1877年、元老院議員の佐野常民<sup>つねたみ</sup>が同じく元老院議員の大給恒<sup>おきょうゆずる</sup>と設立した博愛社に始まる。佐野はすでにパリ万博とウィーン万博で赤十字のパヴィリオンを見て、戦地での負傷者救援に感銘を受け、日本でも同様の篤志団体を設置したいと考えていた。西欧の列強に伍するためにも人道主義に根差す国家であることをアピールする必要もあったと思われる。この年2月に起こった西南戦争で、西郷隆盛の反乱軍と政府軍との分け隔てをせずに、博愛の精神のもとに傷ついた兵士の救護にあたったのが博愛社、後の日本赤十字社である。国際赤十字同様、戦争を契機に日本の元祖赤十字運動も始まったが、ここに至るまでには、佐野、大給等の大変な努力があった。戦傷者が日ましに増えて野ざらしになっている惨状を知り、一刻も早く救援の手をさしのべるために、博愛社設立の請願書と社則5カ条をつくり、4月6日明治政府に結社の許可を求めたが、「敵の傷者でも救う」とする第4条が問題となり、結果は不許可であった。社則には、第1条に、戦傷者の救済（戦争にはかかわらない）、第2条、社の資本金は社員の出金と有志者の寄付金から成ること、第3条、救護者は遠くから識別できるよう標章をつける、第5条、政府に従うのはもちろん、陸海軍の指揮下に入ること、が挙げられていた。佐野はあきらめずに、5月1日薩軍征伐総督の有栖川宮熾仁親王<sup>ありすがわのみやたるひと</sup>に直接請願書を提出、3日諾意を得ると、直ちに救援活動に取りかかる。政府の不許可は8月1日に取り消された（『日本赤十字社史稿』第4章第1節）。日赤の前身博愛社はこのようにして成立したが、国際赤十字の方が一市民の発案によって生まれたのに対し、日本の場合は、創始者が政府や皇室や軍部と近い関係にある上層階級の人達であったという違いがある。このことは、博愛社がその事業を急速に拡大したこと、日本赤十字社と改称してからも諸外国が目を見張るような発展を遂げてきたことと無関係ではない。博愛社は、民間の篤志団体でありながら、天皇を頂点とする中央集権国家の機構に入り、活動は陸海軍の指揮下で行われた。こうして着実に組織を整えていき、1886年11月、日本政府がジュネーブ条約に加盟し、翌年博愛社は日本赤十字社と改称し、国際赤十字同盟への加盟を認定された。世界で19番目の加盟国である。博愛社の設立からちょうど10年めで国際的な基盤をもつことになったのだ。

社名を改称するにあたっては、耶蘇教でないかとの疑惑を抱く者もいたが、それを払拭し、皇室と政府と軍部とのつながりを社則の上でも明確にしていく。社は両陛下眷護の下に置かれ、社長、副社長、病院長の就任は勅許とし、総裁は皇族とすること等を規定し、かつ宮内省、陸・

海軍省の監督下にあることを定め、政府の許可を得た。財源的にも、社員の寄付金だけでなく、皇室からの下賜金をことあるごとに得るようになって豊かになっていった。中でも1912年に昭憲皇太后（明治天皇の皇后）が国際赤十字に寄付をした大口の10万円は、今も国際協力基金として全世界に配分されている。天皇をおおぐ軍部の支配機構に組み入れられた形で上部組織を確固たるものにしていただけでなく、下部組織も充実させていった。今ではあまり見かけなくなったが、ひと昔前には、玄関に日本赤十字社の社員（一般に言う「会員」と同じ）であることを示す赤十字のマークがついたシールが貼られていた家が多かったと記憶している。今も赤十字の人道的な理念や活動に賛同して、年間500円以上の社費を払えば、誰でも社員になって活動を助けることができる。以前ならば、町内の自治会や婦人会が社費を集めて、ごく当たり前のように社員になっていたように思う。このように社員を増やすことができたのは、各道府県に日赤の支部を置き、知事が支部長を委嘱され、行政関係者に他の日赤の役職を兼任させ、地域で日赤の社員を募集したからである。今でも個人社員は1000万人を超えていて（2011年3月1日で1015万人、パンフレット「日本赤十字社現勢」による）、日赤は、災害時の救援活動や募金活動、献血運動等々でごく身近な存在である。日赤病院や日本赤十字の名を冠した看護大学、看護専門学校が日本のように多い国はないと聞く。母が小学生の頃に持っていた日本少年赤十字団の『大御心』と題した小さな冊子には、明治天皇と昭憲皇太后の歌が計100首おさめられている。今の青少年赤十字の昭和11年の活動の一つである。これほど日赤が日本の社会に浸透していても、そのこと自体が世界に例を見ない現象だということにさえ気がついていない。日本が赤十字王国になったのは、博愛社に始まる独自の理念と組織と活動の仕方であった。

西欧が驚くのは、きわめてキリスト教的な慈善（charity）と慈悲（mercy）に基づく赤十字運動が日本にこれほどのスピードで普及していったことである。慈善活動（philanthropy）の長い伝統のあるイギリスでさえ、英赤十字は陸軍省の管轄下に入ろうとせず、伝統のある聖ヨハネ修道会は赤十字社と同じ地位を求め競合し、いくつかの奉仕団体がばらばらに活動をしていた。鎖国を解いて間もない日本が一挙に文明国の仲間入りをする上で日赤が果たした役割は大きい。日露戦争時初めて救急車を使用して行った日赤の救護活動や捕虜の人道的な待遇は他国を瞠目させたし、日赤の社員の多さは各国のうらやむところであった（図版5）。「国際看護婦協会」（ICN）の第二回ロンドン大会（1909年）から日赤の看護婦が招かれるようになったことも、海外で評価が高まったことの表れであろう。イギリスやアメリカの赤十字は、1905年から10年にかけて、日本にならって実質的な改革を行っているくらいである。キリスト教的な「博愛慈善」が、日本に受け入れられやすいものになったのは、「博愛慈善」に一見矛盾するような「報国恤兵」「忠君愛國」の精神を混ぜ合わせたからである。「恤」は今では使われることはほとんどない漢字であるが、「慰める」「救う」の意味で、「恤兵」を付け加えることによって、女性による軍人救護も報国になることを含めたと言える。博愛社は、「事業の順序及



Cartoon describing need for Americans to join Red Cross

図版5 各国赤十字の社員数の比較を見せてアメリカ赤十字に勧誘している漫画 (John Hutchinson, "The history of the Red Cross is anything but dull" CMAJ, 1989 August 15 より)

び将来の目的」をさらに明確にするために、「社則5カ条」を発表した少し後で「博愛社々則附言」を作成しているが、この中に戦時には「報国慈愛の赤心をもって軍医部を補助」すること、社員は「報国恤兵の義務を平時に講究」すべきことが掲げられている（『社史稿』第4章第1節）。「人道」という言葉はここには見当たらず、この言葉が使われるようになったのは、国際赤十字規約を基礎として「その事業は人道を尊重するの主義により」と日本赤十字の方針を記した1901年の条例あたりからではないだろうか。

1906年出版の川俣聲一著『日本赤十字社発達史』には、日赤は相反する博愛と報国の精神を結合したものであることが巧みに説かれている。「博愛慈善一視同仁」は大和民族の先天的品性であり、西欧は宗教の観念から形式には博愛を標榜するが、日本は最初から「報国恤兵」を趣旨として、その結果として「博愛慈善」を施行するのだ、と論じる。従って、同胞に代わって身を危うきに致す軍人には、国民たるもの愛恤して当然ではないか、と、軍人への愛恤がとりもなおさず報国につながることを説く。（第1章緒論）ここからは軍国主義を支える民間機関としての日赤の役割が見えてくる。

また同じ年に帝国廃兵慰藉会も『日本赤十字社発達史』を出版している。第2章には、赤十字事業の根基にあるのは、「大和魂」即ち「日本武士道」で、武士道は「誠忠」を本体とし、「忍耐勤慎不屈」等の諸性を養成することとある。いかに武士道の諸徳が赤十字の精神と接触し、相調和するかを説明している。具体的には、「日本人の苦痛に対する忍耐、死に対する冷淡、喜怒色に表さぬ謹慎」は外人を驚かせているとあるが、『アラス戦線へ』の日本人義勇兵

を思い起こさせる。

機関紙『博愛』にも、日本が昔から博愛の国であって、耶蘇教から来たものではないことを主張する記事が見られる。「古より我郁に充実せる赤十字の精神」と題した、文学博士加藤玄智の論（『博愛』第334号1915年2月）では、戦場で傷病兵を敵味方を問わず収容して、「一視同仁、博愛慈悲の精神を以て取り扱ってやり、仏教で申せば、『無縁の大慈悲』耶蘇教で申せば、『汝の敵を愛せよ』という立派な精神は日本にも早くから存しておったのであります」と論じている。楠正行等敵を救った三つの实例を挙げて、日赤が万国赤十字へ加盟する時にこれらの例を以て古来より日本に赤十字の精神が行われていたことを証明したおかげで、ただちに加盟できたのだとしている。日赤京都支部主事、中村和光による「赤十字主義」（『博愛』第336号1915年4月）によれば、「愛は仁なり、慈なり」は日本固有の主義であり、皇室から家庭まで仁愛を源泉とし国体を形作っている、それがとりもなおさず赤十字事業の源であるという。

日本民族の仁慈博愛と武士道精神に赤十字の人道精神の基盤があるとするこれらの主張は、キリスト教とは別個の日本人の心情の伝統に訴えかけ、近代国家確立に向けて国民意識を高め、富国強兵策を強化するのに貢献したと言える。そして、西欧の行動規範に同調することは、後進国日本が近代化し国際社会に受け入れられるためにどうしても必要なことであった。

## V. 日赤救護看護婦の養成

富国強兵策の一環を担う日赤救護看護婦はいかにしてつくられたのであろうか？欧州に派遣された日赤の「救護看護婦」は、戦時救護の訓練を受けた正式の職業看護婦である。「従軍看護婦」という名称が一般的に使われるが、これは日赤の正式名称ではない<sup>13)</sup>。しかし、第一次世界大戦以後陸軍が一般看護婦を採用するようになり、この陸軍看護婦も志願すれば看護婦として従軍することができたので、「従軍」とした方が包括的であるが、ここでは、第一次世界大戦を扱うので、日赤独自の用語「救護看護婦」という名称を使う。

日本がジュネーヴ条約に加盟した1886年、戦時にそなえての人材養成を見越して突貫工事で博愛社病院が完成している。その目的は、①軍隊の負傷者を救護する看護者を養成すること、②戦時には負傷者の予備病院に供すること、③平時は民間の病者を治療し、看護人に実地の研究をさせることであった（『社史稿』第9章第1節）。博愛社病院は院長以下すべて陸軍軍医が占め、まさに軍と一体となった病院であった。戦時救援のための看護人の養成を目的とする病院は世界でも珍しく、また、同じ時期に日本で設立されていた一般看護婦養成所と比べても特殊である。1883年に始まった有志共立東京病院（現慈恵会病院）を皮切りに、同志社の京都看護婦学校、桜井女学校（現女子学院）、帝国大学医科大学付属医院（現東京大学医学部付属病院）が次々と職業的看護婦の養成に取り組んでいる。これらの看護婦養成所は、当時評価の高かった、科学的・合理的・自立的な看護法を目指すナイチンゲール方式を採り入れるために、英米

から指導者と呼んで指導にあたらせ、またキリスト教的精神も導入していた。博愛社病院では、ドイツから指導者を得ようとしたがかなわず、軍医の指導のもとに軍人看護に重点を置き、天皇制軍国主義に絶対服従の看護教育を目指したのである。ナイチンゲール記事の受賞者が日赤看護婦で占められていることから、日赤とナイチンゲールに特別な関係があるように考えられているが、博愛社/日赤病院では積極的にナイチンゲール方式を採用しようとした形跡はなく、土曜歴史文化会の研究によれば、むしろそのイメージにあやかっただけのようである<sup>14)</sup>。

博愛社が看護婦養成のためにまず着手したのは、賤業視されていた当時の看護婦のイメージアップであった。そのために、1886年日本赤十字社に改称すると同時に、日本赤十字篤志看護婦会が皇室をはじめとする上流階級の女性達によって結成されている。有栖川宮総裁夫人ただこ薫子による呼びかけの趣意書の一節には、「看護事業は、これを金銭のためにせず、高尚なる道徳心を以てすれば、王公の女といえどもその一身を投ずるに足るべき尊貴にして名誉なる事業なり」（『日本赤十字看護婦養成史資料』9頁）と高らかに宣言されている。しかし、これは女性の自立や権利の拡張を促すものではなく、看護を医療の補佐として位置づけ、看護者としては、沈静温和、慈愛に厚く、細心注意を払う特性を持った婦人が適切であるという立場に基づくものであった<sup>15)</sup>。「古来看護を以て賤業となし陋婦卑婆に一任」されてきた看護を奪回し、「軍人の甘苦を安慰し」「一層の勇気を振起」させることは、「本邦婦女の美風を養成助長」することにもなる、と『社史稿』には記されている（第10章第1節）。明治20年代になると、日赤ブームが起こって、日赤の看護婦さんになることが女の子の夢になり、「従軍看護婦の歌」や赤十字の活動を宣伝する「赤十字幻燈」が流行ったというから、皇室による啓蒙活動は効を奏し、日赤病院は女の子の報国志願を満たす受け皿になったと言えるだろう。

篤志看護婦会の11カ条からなる規約（『社史稿』第10章第1節）には、具体的な会の目的や活動の方法、会員の条件等が書かれている。会は、戦時軍人患者の看護法を研究することが目的で、日本赤十字社の監督を受けること、会員は、慈恵の誠意をもち、平素品行貞淑であること、篤志看護婦には給料も報奨金も贈与しないこと、等々を決めている。発起人として名前を連ねているのは計29人の特権階級の婦人達であった。陸軍軍医正足立寛に講師を囑託し、臨時に帝大ドイツ人軍医を招いたりして、月2回看護法救急法についての学習会をもち、1年後には篤志看護婦77名に対して修業証書が送られ、計278名の篤志看護婦を養成したが、1905年を最後に打ち切られている（『社史稿』907-8頁）。

篤志看護婦は、英語では‘voluntary nurse’になり、欧米では、第一次世界大戦中に実際に傷病兵の看護に無給で携わった中流階級以上の女性達を指す。この中には二種類あって、貴婦人の病院ヴォランティアと、速成の看護訓練を受けて実質的な仕事をした主に若い女性達とがいたことは、前に見た通りである。日本では、この篤志看護婦会の人達が戦時救護の担い手であったわけではなく<sup>16)</sup>、軍人患者の慰問等慈善活動で模範を示し、救護看護婦の宣伝をすることが主要な仕事であった。従って、英語の二種類の‘voluntary nurse’のうち前者が日本の篤

志看護婦に近い。日赤救護看護婦は、イギリスの場合陸軍病院等で働く職業看護婦（‘trained nurse’）に相当する。しかし、日赤の欧州派遣救護自体は、自前で行う篤志的事業であった。

戦時救護のための看護教育は、1890年から日赤本社病院（91年に博愛社病院から移転拡張）で本格的に始まる。看護婦養成規則 20 条には、看護婦生徒は 1 年の修学に従事し、卒業後は 2 年間病院で看護婦の業務に服し、「後 20 年間は身上に何ら異動を生ずるも国家有事の日に際せば、速やかに本社の招集に応じ患者看護に尽力せんことを誓うべし」とあり、20 年間（後 15 年間、12 年間と変わる）の応召義務が定められている。徴兵と同じく赤紙の召集状が送られてきて、たとえ乳児がいようと原則応召しなければならない規則になっていた<sup>17)</sup>。生徒の年齢は 20 歳以上 30 歳まで、身体強壯性質温厚、普通の学力等々条件が定められ、入学するのも入ってから非常に厳格であったようで、日赤の看護婦になるのは難しいと世間では考えられていたということである。日清戦争以後、最初は内地陸軍病院、次いで病院船、後には外地の病院で傷病兵の看護にあたったのは、日赤の厳しい教育を受けた女性達であり、看護婦の地位を実質的に高め、国の内外でも高い評価を受けた。

第一次世界大戦で露仏英に派遣された看護婦達は、本社や道府県支部の日赤病院を卒業した優秀な女性達であったと思われる。博物館明治村所有で赤十字豊田看護大学が保管している赤十字資料室（河合利修氏管理）には、30 巻近い欧州大戦のファイルがある。その中に各国に派遣された看護婦取調表というのが綴じられていて、卒業年月日、（過去に従事した）戦役経験、勲章の有無・種類（日清戦争後、看護婦が叙勲の対象になる）身長（〇尺〇寸〇分）、語学、所管、職、氏名年齢が表にして記載されている。ほとんどが 20 歳から 40 歳で、戦役経験がある者も多い。一覧表の後には一人ずつ詳しい調書や戸籍謄本がついている。調書には、「氏族」と特記したものや、「風貌良」「風貌普通」と書いたものもある<sup>18)</sup>。卒業成績何人中何番かということも記されている。赤紙の召集状も綴じられていた。彼女達は、現地の病院で上流階級の篤志看護婦と小競り合いをしながらも、戦時の救急看護を学んだプロの看護婦として、「お国のために」挺身して重大な職務を全うしようとしたに違いない。どのような経験をしたのか、看護の現場はどんなだったのか、患者と接してどう感じたのだろうか？ 残念ながら手記が残されていない<sup>19)</sup>。

#### IV. イギリスの女性達の救護活動と日赤救護看護婦

ここでイギリスの赤十字の組織や活動を比較してみる。英赤十字の直接的なきっかけをつくったのは、クリミア戦争でナイチンゲールが果たした組織的な救護活動である。この戦争は、民間の特派員がニュースを報道した最初の近代戦争であり、トルコのスクタリにあるイギリス軍の兵舎病院の劣悪な医療体制と兵士の悲惨な状況が本国になまなましく報じられることになった。1854 年、政府の依頼を受けたナイチンゲールは、直ちに看護婦や修道女を集め総勢 38 名

でスクタリに出かけて行った。病棟の衛生状態は言語に絶するほど悪く、ベッドやシーツも食器も石鹸もタオルもろくになく、コレラが蔓延していた。それを奇跡的に立て直したのは、最新の衛生法や栄養学を取り入れた看護技術に加えて、ナイチンゲールの指導力、組織力、管理手腕、政治的人脈に依るところが大きい。実際に看護婦として働いたのはクリミア戦争の2年間くらいで、後は看護婦学校の設立や、看護制度への政治的発言や歴大な著作活動を行った。科学的にデータを集め分析する統計家としても後に知られるようになる。イギリスではそれまで病人の世話を専門的知識は不要と考えられていて、肉の誘惑がないという理由で修道女か、下層階級にまかされてきた。ナイチンゲールのような上流階級の女性が、下層階級から看護を取り戻そうとして改革を始めるまでは、チャールズ・ディッケンズの小説『マーティン・チャズルウィット』(1844)に出てくる、だらしなく、貪欲で、飲んだくれでおしゃべりな看護婦セイラー・ギャンプのような看護婦がほとんどだったという<sup>20)</sup>。ナイチンゲールが夜見回りをする時の「ランプを持った貴婦人」というロマンチックなイメージが後につくられたせいで、陸軍病院で働く看護婦というのは、兵士患者の枕のしわを伸ばし、家族への最後のメッセージをあずかり、戦場に出かけては、けがをした兵士に水やその他の「ポエティックなもの」を運んでいくのが仕事といったイメージが一般に広まることになった<sup>21)</sup>。「白衣の天使」というイメージもナイチンゲール以降にできあがった。日本でもこのイメージばかりが先行していて、政治的手腕をふるった実際のナイチンゲールとは異なった偶像が広まっている。

クリミア戦争の救援活動の成果は、1870年の「傷病兵救援全国協会」(the National Society for Aid to the Sick and Wounded)の設立をもたらした。この年イギリスは国際赤十字連盟に加入しているが、これが1905年に現在の英国の赤十字社となる。ナイチンゲールはこの時には協力を惜しまず、1860年に勃発した普仏戦争救援のための募金活動呼びかけ、病院建設、行政、医療援助、物資の輸送等について数々の助言を与えた。しかし、当時イギリスでは、「聖ヨハネ修道会」や「陸海軍人援助協会」等、戦時救護事業に貢献しようとする奉仕団体が競い合っていて、第一次世界大戦が起きた時にもばらばらなままで混乱をきわめた。陸軍省は、これらの奉仕団体が協調してまとめ、赤十字社に陸軍省と各奉仕団体とのパイプ役になってもらいたいと望んだが、赤十字社自体が単独行動をとったばかりか、ジュネーヴ条約に違反して、陸軍の管轄に入ろうとせず、赤十字の標章を勝手に使った<sup>22)</sup>。政府と軍と一丸となった日本の赤十字社とは大きな違いである。しかし、統制がとれていないようでも底力があるのがイギリスである。

こういう状態の中で、イギリスの女性達は、最初はベルギー難民や医療事業のために募金を集める運動や義勇兵を募る(女らしい)運動に参加していたが、それだけでは我慢ができなくなって戦地へとヴォランティアで出て行こうとした。中でも、女性参政権獲得を目指して活発な活動を展開していた女性達の中には、戦争の間運動を中断して戦争協力をし、独自に救援部隊を組織して大陸の戦地へ出て行こうとした者もいる。女性参政権論者やそのシンパは、中流

階級以上に属する教養ある人達だったが、ヴィクトリア朝、エドワード朝のモラルに縛られたイギリス社会には女性の権利の主張は受け入れられず、陸軍省が女性の海外救援部隊を認めるはずもなかった。FANY と呼ばれる 1907 年に設立されていた「患者輸送看護婦部隊」(the First Aid Nursing Yeomanry) は、陸軍省が認めないので、直接ベルギー陸軍と交渉して受け入れられ、1914 年 10 月に最初の一団(総勢わずか 11 名)をパリの仮病院に送りお粗末な設備を改善し、自ら救急車で傷病兵を運んできている。FANY は Yeomanry という言葉が示すように、もともと馬に乗って戦場で負傷者のところへ応急措置のためにかけつけることを目的につくられたが、救急車の時代となり、救急車で負傷者を病院に運んだりするほか、野戦病院を多数設立し、戦場で食糧配給所を開いたり、衛生兵のような働きをしていた。上流階級の女性達で占められ、病院の備品も友人やつてを頼って調達した。その他、ベルギー陸軍に受け入れられたのは、ストバート夫人の「傷病兵護送女性部隊」(the Women's Sick and Wounded Convoy Corps) で、ストバートはドイツ軍に捕まりスパイの嫌疑をかけられたが辛くも釈放され、セルビアへ危険を冒しながら行って医療救援活動にあたった。セルビアへ行くことになった女性は多く、セルビアの赤十字に入ったが後にはセルビア陸軍で活躍する唯一の女性軍曹フローラ・サンズ、スコットランドの医者で陸軍省に協力を申し出た時に、「せつかくですが、家へ帰っておとなしくしてください、ここではペチコートはいりません」と言われたエルジー・イングリス(彼女の病院部隊は、イギリスを除く連合国の各軍隊で活動した)等がいる。英国陸軍省が許可したのは、英国国内でマッサージを提供する女性部隊だけだったという<sup>23)</sup>。



図版 6 VAD の救急車運転手達。1917 年 6 月エタップルにて。(Q 2438, Imperial War Museum, London)  
<http://www.iwm.org.uk/collections/item/object/205191>

女性達が英国陸軍省に反対されてもひるまず、自主的に危ない戦地へと救援活動に出かけて



行ったのは驚くべきだ。カナダから出征した日本人義勇兵諸岡の『アラス戦線へ』には、ヴィーリッジ要塞の総攻撃で負傷した彼が、救護用自動車に載せられて運ばれて行く途中、うすれゆく意識の中でおそらくは運転手の女性の歌う声を聞いたことが語られている。その若い美しいソプラノの歌声は、爆弾がそばに落ちて動じずに「ソールジャーズ・コーラス」を歌い続けたという(322-27頁)。工藤美代子は、いくらなんでも、これは幻聴であろうと書いているが<sup>24)</sup>、イギリス人女性の勇敢な仕事ぶりからして、これはあり得ることだと思う。

さらに、赤十字社の外科医と看護婦の救護班が明確な命令もないまま実際に前線へ飛び出して行って、ドイツ軍に包囲され、スパイの嫌疑を受けるという事件もあり<sup>25)</sup>、陸軍省は戦争開始後二か月で、赤十字社の名前と標章のもとに、聖ヨハネ修道会と聖アンドレ修道会を統合するに至った。看護婦については、戦前から「アレキサンドラ王妃帝国軍事看護奉仕」QAIMNSや「国防義勇軍看護奉仕」TFNS等陸軍病院で働く質の高い看護婦はいたが、大戦がはじまるとこれでは数が足りないことがわかっていたので、赤十字や聖ヨハネ修道会は独自に患者輸送や傷病兵を看護する「篤志救援班」、先に挙げたVADを組織していたのである。国家によってお墨付けをもらうより前に、イギリス人女性達が独自に戦争協力の道を見出していたことは注目すべきである。

VADの看護婦や救急車運転手として働いた女性達は、自伝や手記を数多く残していて、戦後一度は出版されたものの長い間絶版の状態が続き(中にはすぐに発禁処分になったものもある)、1980年代から英米のフェミニスト系出版社が再版を出すようになり、男性の書いた従軍記や戦争詩だけでなく、女性の戦争体験記が西欧の文学、歴史研究者の間で始まってきている。ヴェラ・ブリテンはオックスフォード大学に在学中の1915年5月にVADの看護婦に志願し、戦争の間中ロンドン、マルタ島、フランスのエタプル等の戦線で職務に就いた。その間兄、婚約者、友人を戦闘で失っている。ブリテンを作家として一番有名にしたのは、戦前から戦後に至るまでの激動の時代をとらえた自伝『青春の遺言書』(1933年出版)である。兄や婚約者が開戦初期のヒロイズムと戦争の持つ崇高な一面に共感して入隊したこと、ヴォランティアの看護婦として傷病兵に接した経験、そして戦後の幻滅と失意の中で新しい生き方を見つけていくまでのことが感動的に語られている。大戦によって青春を蹂躪された「失われた世代」へのエレジーでもある。この本が再版されたのは1978年で、その後何度も再版を重ねているから、その人気うかがえる。イーニッド・バグノールドの『日付のない日記』(1917)はロンドン、ウリッジにある病院でVADの看護婦をした経験を書いたものだが、病院の管理運営に批判的な内容であったため直ちに解雇され、フランスに渡って今度はFANYの救急車運転手となり、それを題材に『幸せな異邦人』(1920、再版1987)という小説を書いた。フランスのYMCAのキャンプで戦時奉仕をし、後ロンドンでVADの看護婦として働いた時に味わった極度の疲労と恐怖の体験を、アイリーン・ラズボンは『若かった私達』(1932、再版1989)という小説に仕立てている。VAD以外の篤志看護隊で働いた女性達も多く作品を残しているが、アメリ

カの富裕な家庭に生まれ、フランス赤十字社で看護婦として働き、後には野戦病院も設立したメアリー・ボーデンの『禁じられた地帯』(1929、再版 2008) は、戦争の無秩序そのままの断片的な文体で壮絶な看護現場を再現している。ボーデンと同じ野戦病院で働いたアメリカ人看護婦エレン・ラ・モットは、『戦争の引き波—アメリカ人看護婦が目撃した戦場の人間の残骸』(1916) も皮肉をこめて外科病棟の矛盾に満ちた現実を暴き出している。

女性の自立ということに関して、同じ時代の日本ではどのように考えられていたかを比較してみようと思う。

イギリスに派遣される看護婦を集め、小澤日赤副社長は 1914 年 12 月 1 日に訓話をしているが、その中で次のような注意を促している。

それから一つ申しておきたいのは、近来欧米各国に女権拡張ということが非常に流行る。その中でも英国ロンドンのごときは女権拡張論者が非常に盛んになっておる。近頃の新聞紙などで見ると、大戦争のために随分屏息したらしい。美術館博物館のごときも女権拡張論者が暴行するので、一時公衆の参観を禁じてあったが、戦争になってからスッカリ止んでいるとのことで、博物館や美術館も閉館していると、近頃英国から帰って来た人の話であるから、余り心配はないようであるけれども、万一斯様な女権論者が諸君の傍へ寄りつくかも知れない。これは一概に悪く言うことはできぬけれども、日本の婦人としては甚だ禁物であるから、そういうものには少しも心を許さず、斯様な病毒には感染せぬようにしたいのである。(『博愛』330号、1914年12月10日)

ここで例に挙げられている過激な女権拡張論者(suffragettes)は、「言葉より行動」をスローガンに掲げて襲撃、破壊、放火等暴力的な示威運動を繰り返したので、政府も手をやいて次々と対抗策を打ち出さなければならなかったし、世論も批判的であった。ところが、戦争が始まるや戦争支持の先鋒となり、政府に協力し、極端から極端へと走ったのである。平和主義を標榜した穏健な女性参政権論者(suffragists)も、世論におされて好戦路線に修正せざるをえないほど、当時イギリスでは全体として戦争反対運動は低調であった<sup>26)</sup>。この訓話でイギリスの参政権運動に触れて、「日本の婦人としては甚だ禁物である」と戒めているのは、看護婦としての活動は良妻賢母の婦徳の延長線上にあり、国家における婦徳の実践であることの確認であり、国家社会に出て活躍することがそのまま女権の拡張を意味するのではないことの念押しである。

日本では、明治の中頃(1890年代)から、禁酒、廃娼、平和を掲げる日本基督教婦人矯風会の機関誌『婦人新報』や、日本初のインテリ女性誌『女学雑誌』等が女性の地位向上、権利の拡張を訴えて、新思想が徐々に広まりつつあった。「女学」というのはそのための学問であった。この頃始まったばかりの職業看護婦というのは自立した女性の生き方を切り開くものと思えるのだが、少なくとも看護班を派遣した日赤の『博愛』を見る限り、女性が職業に就いて天

性である家政をおざなりにすることは西洋かぶれであると警告する記事が目立つ。「家政の整理に全力を傾注」した上で、「余力と時間の余裕があれば赤十字とか慈恵事業とか、婦人適当の事柄に尽力すべきである」というのが、「日本婦人の責務」という記事の主張である。(法学博士添田壽一述『博愛』334号、1915年2月) また、「婦人の教育と職業との問題」と題した記事では、参政権運動に触れて、「婦人が主婦として家庭のことに全力を尽くしても尚足らぬのに、斯様に公の職務に奔走するのは家庭及び社会の基礎を危ううし、女子の天性を屈する危険千萬なことであるから、女子の職業問題も其の程度を超えてはならぬ。」(東京音楽学校長湯原元一述『博愛』341号1915年9月) これでは、家族の看護が女性の手任せられてきた長い歴史に逆戻りである。ようやく看護が専門職化され、日赤看護婦の戦時救済活動が認められてきた時代に、こうした伝統的な女性の責務を喚起することは支離滅裂に思える。看護婦達はどのように内面でこの矛盾を解消していったのだろうか? 軍国主義の下では、「女の軍人さん」として上からの命令に唯々諾々と従っていたのだろうか? だとすれば、女性の隷属が派遣救済事業を支えていたということになる。20年間の厳しい応召義務が課され、どこにしようが、どんな境遇であろうが、赤紙で召集されて男子と同じように従軍しなければならないとすれば、どのように家政に全力を傾注することができるのだろうか? 乳幼児がいることや家族の看護・介護はどの程度召集免除の理由として認められたのだろうか? 果てしなく疑問が湧いてくる。

前に言及した帝国陸兵慰藉会の『日本赤十字発達史』(1906)は、第2章で赤十字精神と武士道との結びつきを説いていた。第3章「赤十字事業と日本婦人」では、女性も武士道精神を本来持っていて、国家のために何かしたいという心意気を持っているから、救済作業に向けた温順さを赤十字事業に生かすのが最適であると論じている。曰く「赤十字の戦場たる病院」で武士道によって涵養された美德を発揮するのがよいと説く。亀山美知子は、この考え方について、天の半分を支えている女性に力を求めないと半分の効果しかないと言っているだけであって、女性の自立を認めたのではなく、いわば「制限付きの女性の解放」であると述べている<sup>27)</sup>。先に引用した1914-5年頃の『博愛』の記事よりは、はるかに女性の社会的進出を認める進歩的な主張が10年も前になされていたように思えるのだが、新興日本の矜持をかけて日本女性の条件付き自立を国家の政策中に取り込む必要があったというのが実情であろう。看護婦は本来温順な女性の天職であり、女性でも恤兵を通して報国という名誉を得られるという論理は、軍国主義国家にとって必要であった。良妻賢母の聖性を帯びた看護婦だけを戦争中の女らしい貢献として男性の聖域に認めたのである<sup>28)</sup>。こうして、家父長制社会における女性の隷属をそのまま軍事体制に継続させる時、家という私的領域と国家という大きな世界の両方で婦徳を要求されることの矛盾が『博愛』の記事からは見えてくる。

戦時救済事業は、第一次世界大戦以後ますます大規模に続けられ、アジア太平洋戦争では召集された看護婦達が戦地で危険な業務に携わり、玉砕した数は2万人にのぼる。「赤十字の戦場たる病院」が単なるメタファーではないことは、日清・日露戦争、シベリア派遣、日中戦争

でも看護婦の死者が出ていることでもわかるが、アジア太平洋戦争でのこの事実をどう受け止めるべきなのか課題は大きい<sup>29)</sup>。従軍看護婦への補償金が軍人恩給に準じて支払われるようになったのは、ようやく1960年代に入ってからである。

ヴェラ・ブリテンは、ギリシャのレムノス島に埋められた仲間の看護婦に寄せて書いた詩に、

看護婦達が歌や物語に出てくることはほとんどない。

詩人達は戦争で兵士が示した剛腕と偉業をたたえるが、

看護婦達や、遠い星の下で死んだ女性達の

栄光を称賛することはまずない<sup>30)</sup>。

という一節を記している。イギリスでは、数の上でも最大の犠牲を払った将兵の体験が詩に詠まれ、伝記、伝記的小説、手記等々に書き残され、大戦の記憶は彼らの記憶に重なってきた。女性の戦争体験記が1980年代から再版されるようになって、救護する側の人間が味わった苦悩の体験が「もう一つの大戦の歴史」としてようやく歴史家や文学研究者から注目を浴びるようになったところである。第一次世界大戦では、幸い日本の救護看護婦の犠牲者は出なかった。日本にとっては、第二次世界大戦をどのように記憶していくかという問題を考える上でも、兵士と併せて救護看護婦を視野に入れることが必要であろう。

欧州派遣の救護看護婦は、現地の病院でどんな体験をし、何を考えたのだろうか？日赤社史稿に記録された患者の症状別分類や入院期間や死亡者数を示す一覧では見えてこない、彼女達自身のなまの声を知りたいと思う。英米の看護婦のように発言力を持たなかったのは、国家の政策を超えて、またジェンダーの規範を超えて戦争貢献をしようとした者と、(男性によって)国家的に組織された活動の中で従順に役割を果たそうとした者との違いなのだろうか？その差は、女性の権利についての問題意識をどれだけ持っていたかの違いでもある。

#### 謝辞

\*本稿は、2012年3月16日大阪駅前第2ビルでのアイアイの会(代表:上田千代子氏)での発表に基いています。お招きくださった床田千晶さん、看護婦の制服について調べてくださった出川春海さん、ひょっこり顔を出されて貴重な意見を言ってくくださった高橋哲雄先生はじめ、熱心に聴きかつ質問してくださった会の皆さんに感謝します。また、カナダの日本人義勇兵と日赤救護班についてご教示くださった山室信一先生、そして第一次世界大戦を広い視点から研究するための刺激を与えてくださった京都大学人文科学研究所共同研究「第一次世界大戦の総合的研究」研究班の皆さんにも感謝します。My thanks also go to Annick Vandembilcke and Dominiek Dendooven at the Knowledge Centre, In Flanders Fields Museum, Ypres, who showed me a photo of a Japanese nurse at the Western Front, which unexpectedly led me to do research on the Japanese Red Cross. They were always of great assistance to me. I am also grateful to the staff of the Imperial War Museum, as always, who provided me with the photo of a Japanese soldier.

そして、赤十字資料室の貴重な史料を快く閲覧させていただきました日本赤十字豊田看護大学の河合利修先生とお世話になりました図書館の皆さん、『博愛』その他の史料の閲覧にご協力いただきました

赤十字情報プラザの横山瑞史氏、日本赤十字京都府支部、奈良県立情報図書館、国立国会図書館関西館、同志社大学人文科学研究所図書館、そしていつも変わらずご支援くださる大阪市立大学学術情報センターの皆さんに感謝をささげます。

\* 本稿は、日本学術振興会 2010 年度科学研究費補助金による基盤研究 (C) 「ジェンダーから見た第一次世界大戦の表象」(課題番号 22510291) の成果の一部である。

【注】

- 1) 山室信一『複合戦争と総力戦の断層—日本にとっての第一次世界大戦』レクチャー 第一次世界大戦を考える(人文書院、2011年)。加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』(朝日出版社、2009年)。
- 2) Olive Checkland, *Humanitarianism and the Emperor's Japan, 1877-1977* (NY: St. Martin's P, 1994), 71.
- 3) 川俣馨一編著『日本赤十字社発達史』(1906年)や『日本赤十字看護婦養成史資料』(1927年)によれば、戊辰戦争で初めて女性看護婦を募集したが、気の荒い武者を相手にするとあって、応募してきた者は、無学の賤婦、所謂「バクレン」と呼ばれた女達であった。女性が家族以外の男性を看護するのはふさわしくないという風潮があったため、看護婦の始まりを身分の低い者とするのが定説になっていた。しかし、これは応急的に集められたにすぎないので、専門的教育を受けた職業看護婦の起源とは別であると考えられている。Cf.. 亀山美知子『近代日本看護史 I 日本赤十字と看護婦』(ドメス出版、1983年)、112。南条薫『日本の看護婦』(三一書房、1970年)、12-3。
- 4) もともと赤十字が生まれた背景にあるのは、兵士が傭兵ではなく、一般の国民から募られるようになり、そのため軍や政府や王室が傷病兵の救済のために中立的な組織を必要としたことではある。赤十字共同研究プロジェクト『日本赤十字の素顔』野村拓(監修)(あけび書房、2003)、42-7。
- 5) 「鈴木医長英国派遣救護班の勤務状況に関する演術要旨」日本赤十字豊田看護大学赤十字史料室文書「欧州戦乱 英国派遣救護班関係」(ファイル 戦 719)
- 6) Checkland, 78.
- 7) 円満な関係は当初のみで、日を経るにつれ日露の看護婦同士の衝突が激化していったことが鈴木医長の手紙(1915年8月15日付)には書かれている。河合利修「第一次世界大戦中の日本赤十字社による英仏露国への救護班派遣」『軍事史学』第43巻第2号(2007年9月25日)の指摘による。河合氏は、フランスでも現地の篤志看護婦と日本の看護婦との間で、ロシアほどではないが問題があり、一番友好的だったのはイギリスであったとしている。
- 8) 1915年『戦争の巴里』として出版。『島崎藤村全集』第12巻(新潮社、1949年)所収。
- 9) Philip Hoare, *Spike Island: The Memory of a Military Hospital* (London: Forth Estate, 2001), 190.
- 10) 「上野医長露国派遣救護班の勤務状況に関する演述要旨」(1916年5月19日)は、ロシアの篤志看護婦所謂戦時看護婦は、立派なお嬢さんや奥さん方で、4か月、近頃は2か月で看護学を速習しただけで、職業看護婦と同様の待遇を受けている、それに身分が低く、字もろくに読めない兵士患者を奴隷扱いにしている、と報告している。「欧州戦乱 露国派遣救護班関係」(戦 716) また、時代を遡るが、『婦人新報』第87号(1904年7月)には、「ひやかし半分の病院慰問」と題して、傷病兵の見舞いに令夫人令嬢等が飾り立ててやってきて、一室々々を見回るのが面倒くさいから、傷兵をみんなひとまとめに集めてくれるように言った話が載っているから、いずこも同じというべきか。しかし、塩田広重の自伝『メスと欽』(桃源社、1963年)には、上流婦人の誠意のない例もあるが、無報酬でも献身的に勤務する篤志看護婦は驚嘆に値すると、藤村の記述とはニュアンスが異なる評価がなされている。116-7。
- 11) John Hutchinson, "The history of the Red Cross is anything but dull" CMAJ, Vol. 141, August 15, 1989 <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC1269516/pdf/cmaj00197-0074.pdf>
- 12) John Hutchinson, *Champions of Charity: War and the Rise of the Red Cross* (Bolder: Westview, 1996). 『日本赤十字の素顔』56-7。小林政行『「赤十字」とは何か—人道と政治』(藤原書店、2010年)、

42-3。

- 13) 川口啓子・黒川章子『従軍看護婦と日本赤十字社—その歴史と従軍証言—』(文理閣、2008年)、71-2。南条15-6。秦邦彦『日本陸海軍総合事典』第二版(東京大学出版会、2005年)には、「従軍看護婦」という見出しがある。
- 14) 土曜会歴史部会(代表執筆・高橋政子)『日本近代看護の夜明け』(医学書院、1973年)、170-3。
- 15) 若桑が指摘するように、「戦地に赴く勇氣」や「生血を見ても平氣の平左でいる」という所謂男性的資質も看護婦には必要であるが、これらは、「代理母」としての看護婦にのみ許される強さであった。若桑みどり『戦争がつくる女性像』(筑摩書房、1995年)、52、95-6。
- 16) しかし、日赤看護婦養成が始まって間もなく起こった日清戦争では、篤志看護婦も救護看護婦の取り締まり役として従軍したり、北清事変でも実地の救援看護に携わったりしている。患者の慰問や恤兵品の贈答、包帯製作ばかりではなかった。川俣、263-271、521-537。亀山、47、52。南條、14。
- 17) 川口・黒田、69-71。南条、22-4。秦、740。
- 18) 日清戦争時には、兵士が劣情を起こさないよう、「なるべく年をとりて且つ美貌ならざる者」を選定すべきことが念頭に置かれた。『日本赤十字看護婦養成史資料』、19。
- 19) 筆者が目にした露仏英派遣日赤救護班の看護婦の記録は、日赤石川従軍看護婦の記録編纂委員会『日赤石川従軍看護婦の記録』(日本赤十字社石川県支部、1974年)だけである。石川県から選ばれて英国へ派遣された松田きくゑの談が掲載されていて、病院の思い出としては、日本看護婦は非常に評判がよく、特にマッサージが好評で、英国の看護婦さんは荒っぽく病院内を飛んだりはねたりしていたことが語られている。27-9。
- 20) A. H. ジョーンズ『看護婦はどう見られてきたか—歴史、芸術、文学におけるイメージ—』中島憲子監訳(時空出版、1997年)、108-9。
- 21) E. Charles Vivian & J. E. Hodder Williams, *The Way of the Red Cross* (London: Hodder & Stoughton, 1915?), 88, 116.
- 22) B. エイベル・スミス『英国の病院と医療—二百年の歩み』(保健同人社、1981年)、266、275。
- 23) 女性の活動については、Neil R. Storey & Molly Housego, *Women in the First World War* (Oxford: Shire Publications, 2010)、5-13を参照した。他に、Diana Condell & Jean Liddiard, *Working for Victory?: Images of Women in the First World War, 1914-18* (London: Routledge & Kegan Paul, 1987)
- 24) 工藤美代子『黄色い兵士達—第一次大戦日系カナダ義勇兵の記録』(恒文社、1983年)、140-1。
- 25) B. エイベル・スミス、267。
- 26) Martin Pugh, *Women and Women's Movement in Britain 1914-1959* (Basingstoke: Macmillan, 1992)、10-11。
- 27) 亀山、112-4。
- 28) 従軍慰安婦は、上野が指摘するように、女性性に与えられたもう一つの側面—娼婦性—を担わされている。「軍人の甘苦を安慰し」「一層の勇氣を振起」させるという看護婦に望まれた特性(本稿30頁)がそのままあてはまる。上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』(青土社、1998年)、74。
- 29) 川口・黒田は、第二次世界大戦の従軍看護婦二人の証言を記録し、問題提起をしている。
- 30) Vera Britain, 'The Sisters Buried at Lemnos', *Verses of a V.A.D. and Other War Poems* (London: Imperial War Museum, 2003), 29。

【引用・参考文献】(原則として本文または注に挙げたものは除く)

- 博物館明治村所蔵 日本赤十字豊田看護大学保管 日本赤十字社文書「欧州戦乱」関係ファイル  
 日本赤十字社編『日本赤十字社史稿』日本赤十字社、1911年。  
 —————『日本赤十字社史続稿 自明治41年至大正11年』上下巻 日本赤十字社、1929年。  
 —————『博愛』マイクロフィルム、1914-5年。  
 —————『日本赤十字社看護婦養成史料稿』1927年。2007年復刻。  
 —————『日本赤十字社看護婦養成百周年記念誌』1991年。

- 『人道—その歩み 日本赤十字社百年史』1979年。
- 『日本赤十字社創立130周年記念誌』2007年。
- 川俣聲一『日本赤十字社発達史』日本赤十字社発達史発行所、1906年。
- 帝国廃兵慰藉会『日本赤十字社発達史』帝国廃兵慰藉会、1906年。
- 日本赤十字社編『日本赤十字社看護婦養成史料稿』1927年。2007年復刻。
- 赤十字刊行実行委員会『日本の赤十字』日本赤十字社、1955年。
- 井上忠男『戦争と救済の文明史—赤十字と国際人道法のなりたち』PHP研究所、2003年。
- H. M. エンチェンスベルガー『武器を持たない戦士たち—国際赤十字』小山千早訳、新評論、2003年。
- 河合利修編『赤十字史料による人道活動の展開に関する研究』日本赤十字豊田看護大学、2007年。
- 北野進一『赤十字のふるさと ジュネーヴ条約をめぐる』雄山閣、2003年。
- 黒沢文貴・河合利修編『日本赤十字社と人道援助』東京大学出版会、2009年。
- 小池政行『「赤十字」とは何か—人道と政治』藤原書店、2010年。
- 『国際人道法—戦争にもルールがある』朝日新聞社、2002年。
- ジャン・ピクテ『国際人道法の発展と諸原則』井上忠男訳、日赤会館、2006年。
- 『解説 赤十字の基本原則—人道機関の理念と行動規範』井上忠男訳、第2版、東信堂、2010年。
- 吹浦忠正『赤十字とアンリ・デュナン』中公新書 中央公論社、1991年。
- 「アンリー・デュナン」教育研究所編『従軍看護婦記録写真集 ほづつのあとに』メヂカルフレンド社、1981年。
- J. アンリ・デュナン『ソルフェリーノの記念』寺家村博訳、メヂカルフレンド社、1983年。
- 析居孝『世界と日本の赤十字』タイムス、1999年。
- Thelka Bowser, F.J.I., *The Story of British V.A.D. Work in the Great War*. 1917; London: Imperial War Museum, 2003.
- ジョセフィン・A・ドラン『医療・看護の歴史』小野寺康博・内尾貞子訳、誠心書房、1978年。
- 杉田暉道他『系統看護学講座 別巻9看護史』第7版 医学書院、2005年。
- M. Adelaine Nutting & Lavinia L. Dock (ed.), *A History of Nursing* 4vols. 1907-12; Bristol: Thoemmes Pr, 2000.
- Martha Vicinus, *Independent Women: Work and Community for Single Women*. ChicagoUP, 1986.
- Lytton Strachey, *Eminent Victorians: Cardinal Manning, Florence Nightingale, Dr Arnold, General Gordon*. London: Chatto & Windus, 1979.
- 『カナダ移民史料』全12巻 不二出版、1995-2001年。
- 『大陸日報』マイクロフィルム 1908-41年。
- 高村宏子『北米マイノリティと市民権—第一次大戦における日系人、女性、先住民』ミネルヴァ書房、2009年。
- Roy Ito, *We Went to War: The Story of the Japanese Canadians Who Served During the First and the Second World Wars*. Sittsville: Canada's Wings, 1984.
- Kaye Kishibe, *Battlefield at Last: The Japanese Canadian Volunteers of the First World War, 1914-1918*. Toronto, 2007.
- 木畑洋一・小菅信子・フィリップ・トゥル編『戦争の記憶と捕虜問題』東京大学出版会、2003年。
- 黒野耐『大日本帝国の生存戦略』講談社、2004年。
- 鹿野政直『日本の歴史 27 大正デモクラシー』小学館、1976年。
- 富田弘『板東俘虜収容所—日独戦争と在日ドイツ俘虜』法政大学出版会、1991年。

早川紀代編『戦争・暴力と女性 2 軍国の女たち』吉川好文館、2005年。

平間洋一『第一次世界大戦と日本海軍—外交と軍事との連接』慶應義塾大学出版会、1989年。

吹浦忠正『捕虜の文明史』新潮社、1990年。

吉野作造『婦人問題』民友社、1916年。

【2012年9月6日受付, 10月30日受理】

## ‘Women Soldiers’ Delegated to Europe —the Japan Red Cross Relief Corps and the First World War

ARAKI Eiko

Japan entered the First World War on the pretext of the Anglo-Japanese Alliance. She did not send any army to Europe but instead delegated the Japan Red Cross Relief Corps mainly consisting of nurses to Russia, France and Britain. The nurses had already experienced military nursing in hospitals and on ships in previous conflicts (the Sino-Japanese 1894-5; the Russo-Japanese 1904-5), which gained a reputation both at home and abroad. This mission to Europe was politically most challenging for the government and for the Japan Red Cross which adhered to the International Red Cross Convention in 1887. The Japan Red Cross Society had developed rapidly with a unique system of administration that included a central organization employing a mixture of European humanitarianism and Japanese patriotism. It was under the command of the military and patronized by the Imperial Family. The Japanese Mission to Europe was successful and deeply appreciated.

This paper focuses on Japanese nurses' activities in hospitals abroad during the early years of the First World War from various sources and perspectives. In the course of the rapid modernization of Japan after its coming into contact with the West, how the Japan Red Cross formed its military nurses as 'women soldiers', how they were accepted in society, and how they played their roles when confronted with Japanese traditional ideas about women are also my concerns.